

I—III 文学と社会

(議長 杉本秀太郎)

上垣外 憲一

杉本 ただいまからセッションとしまして、文学と社会のセッションですが、上垣外憲一さんに「日本文学の社会性」の発表をしていただきます。

上垣外 日本文学の社会性ということで、社会という言葉を使っただけですけれども、これももうすでに雑談の形で皆さんからいろいろコメントをいただいているんですが、社会とはなんぞやというとたんへん難しいと思うんですが、一応用語の定義の問題はさておいて、少数ではなくて多数の人間の集まりであるというふうに考えておきたいと思います。その最も大きな形態として国家というようなものを考えていいんじゃないかと思うわけです。

戦争と貧困という題名で書きましたけれども、どちらもないへん大きなテーマですので、とても日本文学の中で探しても探しきれないほどたくさんありますし、もし世界中に探すとしたら、とてもではないけれども一人ではやれない。多少貧困のほうの文学の例が少なくなってしまうと自分でも思っています。

現代の文学を扱うはずのこのシンポジウムなんですが、戦争ということの特に関心がある場合、第二次世界大戦に際して書かれた文学というのはいくらも量にのぼっているわけですし、私はもちろん全部読んでいませんし、これを整理するというのは、とてもいまの時点では、私は無理で

あるというふうに判断しました。ですから、実は戦争と文学ということと言いますと第二次大戦と日本文学というのは一番重要で一番大きいテーマなんですが、その一番大きいところを省いてしまったことをおわびいたします。

文学は人間社会の産物である以上、すべての文学は社会的であるという言い方は可能であろう。

しかし、文学の描写する対象を分類するとき、個人の内面を描写する文学と社会に於ける人間関係に主眼をおく文学の区別が生まれる。

個人の感情にしても、個人と個人の問題すなわち恋愛によってひき起こされる感情と、総体としての社会の病理現象と考えられる戦争や貧困によって引き起こされる感情の文学的表現は当然区別される。

この論考では戦争と貧困という社会現象が日本文学によってどの様に取り扱われてきたかを比較文学的な視野から考察する。

日本文学にもっとも大きな影響を与えてきた中国文学は唐代にいたって杜甫（七一二―七七〇）という戦争と貧困をつ

ぶさに描き出した大詩人を出した。彼は長安の都から出征していく兵士から、徴発に苦しむ地方の荒廃と戦死者の白骨が荒野に散乱する前線の悲惨な状況を聞いて、その痛憤を長詩「兵車行」に表現した。杜甫は安祿山の乱の戦乱のなかで一家離散の逃亡生活の辛苦を体験し、その苦しみと悲しみを作品の中に歌いこんだ。

安祿山の乱のおわった後も、杜甫は貧困と病気に苦しんだ。その苦難の生活のなから生まれた作品は中国文学を代表するものである。

中国文学の影響を強くうけた韓国においては、杜甫は最も尊重された漢詩人であった。それを典型的に表すのは、一五世紀に作られた、杜甫の詩の韓国語訳、「杜詩彦解」である。杜甫の詩は、戦争や貧困の中にある民衆の苦難を思う、という儒教的なヒューマニズムの最高の表現として、中国、韓国の政治支配階級である士大夫の教養の中に生き続けてきた。次に引用するのは、一五九〇年代の豊臣秀吉の朝鮮侵略、文禄、慶長の役の記録「懲録」の一節である。

一日夜大雨 飢人在余左右 哀吟呻口 不可忍聞 朝起
視之 狼藉而死甚多

著者の柳成龍は、当時の朝鮮政府の要職を歴任した高級官僚

である。彼の記録は外交、軍事の重要事件を詳細に記すとともに、戦乱の中の民衆の悲惨な生活にも章を割いている。これは、民衆の生活に対して責任のある士大夫の責任感の発露であるが、同時に文学の表現として考えるならば、それは戦争に際して、まず庶民の苦悩に焦点を当てるといふ杜甫の詩作品の後裔といえる。

比較のために言えば、文禄慶長の役の日本側の記録にはこのような民衆の悲惨さを描いたものは極めて数が少ない。日本側の記録の大部分は、出陣した大名達の戦功を語ることが目的であつたから自軍の壮烈な戦いぶりを描写することに主眼があり、民衆の生活は一顧だにされなかった。

日本に於いては、杜甫のように、民衆の立場から、戦争、貧困の苦悩を描くという文学を数えることはむずかしいように思われるが、ここで日本文学史における戦争と貧困の記述を概観してみたい。

日本文学における貧困を主題とする作品の最も古いものは、「日本書紀」「日本霊異記」に記す聖徳太子の逸話である。片岡山で聖徳太子は窮民に着物を与える。書記に記す歌謡は、仏教における慈悲心の文学的表現といえる。

しなてる 片岡山に 飯に飢て 臥せる その旅人あはれ
親無しに 汝生りけめや さす竹の 君はや無き

飯に飢て 臥せる その旅人あはれ

聖德太子によって建立されたという四天王寺は七世紀前半の段階で悲田院と呼ばれる貧民のための慈善事業施設を備えていたと考えられるから、貧民を自ら救済する聖德太子の姿は、このような仏教的な社会意識、社会悪に対する責任感の現れと考えてよい。平安時代、鎌倉時代においても、このような貧民の救済は政府の仕事であるよりは、仏教寺院の担当であった。

しかしもちろん律令制を中国から導入した日本にも、儒教的な政治支配者層の社会意識が存在しなかったわけではない。奈良時代から、平安時代初期にかけて、律令制による地方政治を担当した中級の官吏の政治に対する責任感を表出した文学者として山上憶良と三善清行をあげることができる。

憶良の「貧窮問答歌」では、火の気のない家でぼろをまと飢えと寒さに苦しむ一家に、容赦なく鞭を手に税を取り立てに来る里長の姿が描かれる。このような古代国家に搾取され、追い使われる人民の困窮にたいする同情の念の表出は、まさしく杜甫の作品に相通ずるものである。

三善清行の「藤原保則伝」は八七八年の俘囚の乱の顛末を記した漢文で後代の軍記物の最も初期の形態を示すものと考えられている。しかし叙述の中心は戦闘の詳細ではなく、こ

の戦役が地方官の横暴から始まったことを強調し、保則が善政をしいて蝦夷の酋長らを慰撫したことに、力点がおかれている。

文章の冒頭は、日照りによって田畑が荒れ、百姓が飢饉に苦しむ様子である。さらに保則の前任者が苛酷な政をしいて獄に囚人が満ちていたのを、保則の仁政によって豊かな国に生まれ変わったようすが語られる。

俘囚の乱でも、華々しい戦闘の場面はなく、官軍が惨敗して、将も瀕死の重傷を負ったり、死者の中に隠れてようやく難を免れたといった戦場の悲惨な有様の描写が行われる。

また反乱の原因も、秋田城司の都良岑が苛酷な政をしいたためであるとして、政府の責任であることを明らかにしている。このように、清行の戦争に対する考え方は、戦争が起こるのは、政治が悪いためであるということに尽きている。したがって、戦争での勇者の描写などは、どこにも見られず、乱の後の民生の安定につとめる保則の努力に、描写の焦点が置かれる。このような、戦争の勝利よりも、戦争を起こさないような善政、平和時の農業生産と治安の維持の方がはるかに重要であるという姿勢は、儒教的な平和主義、民生中心主義とも呼べよう。

このような東アジアの政治担当者層に共通する、民生への責任感はいわゆる日本においては、律令政治の崩壊と共に影を

ひそめる。軍記物の代表作である「平家物語」のなかに戦乱の被害に苦しむ民衆の姿はない。鎌倉時代の支配者、公家と武士と僧侶の思想と行動はあっても、庶民の視点はそこにはない。

平安後期の朝廷は、地方政治についての決裁は、天皇、上層貴族の業務ではなくなっていく。その空隙を埋めるように、宮廷の日常は様々な年中行事で埋め尽くされていく。このような宮廷生活のなかに育まれた王朝文学に地方の民衆に対する同情などは、もちろん求め得ない。社会事業を担当するべき仏教界も貴族化して、そうした関心から遠ざかる。新古今集の代表的な歌人、慈円は関白九条兼実の弟であり、天台座主を長期にわたって勤めた高僧である。慈円には仏教的な観点から日本の歴史を批判的に叙述した「愚管抄」がある。

そのように、社会現象を一定のイデオロギーによって解釈することのできた慈円の歌に民衆の生活にたいする自己の使命感を織り込んだ次のような和歌のあることは、ある意味で当然である。

おほけなく 浮世の民におほふかな

我がたつそまに墨染の袖

慈円の歌には、小数ではあるが民衆の日常生活を詠んだ次

のような歌がある。

それもしつめに藍しむ物はりの

しばしとりをくたすすがたよ

爪を染料の藍に染めて働く職人の姿である。

たれならむ 目をしのこひてたてる人

ひとの世わたるみちのほとりに

目のしよぼついている老人だろうか。所在なげに道端に立っている。人々がせわしなく行き交う道のはたに。

このような庶民の生活に対する思いやりの歌は、鎌倉時代における、忍性のような社会事業家の活動を我々に思い起こさせる。最初にあげた「おほけなく」の歌は、定家の撰になる小倉百人一首に慈円の代表作として選ばれて、人口に膾炙しているが、このことは鎌倉期における、仏教界の期待される役割のあり方を象徴しているともいえる。社会事業への仏教の参画である。

しかし、慈円の一般に知られる歌風はおだやかで優美な自然詠であって、いかにも貴族の最高の家に生まれた人にふさわしいものである。

雨はれぬ夏の夕風かほりきて

軒はすずしきあやめ草かな

こうした花鳥風月の世界から人間臭い庶民生活へと、日本の詩がその焦点を移すということはついに起こらなかった。

南北朝の動乱を描く「太平記」には、宋学的な政治理念がうかがえる。民生重視の立場からの戦争批判の言葉も、時に見られる。北条泰時、時頼の善政をたたえ、中国の理想の帝王、周の文王や周公旦の故事を引く。また周の太王が、異民族の侵入に際して、人民に苦難をかけるわけには行かないとして、戦闘を避け、都を移した故事を引用する。戦争よりも、民生を為政者は第一に考えるべきだという儒教の平和思想がそこには読み取れる。

卷第三十三では、「飢人投身事」として、富み栄えていたものが二十年の戦乱の中で財産をすべて失い、丹波へと落ちていく苦難の有様が語れる。二人の子供と妻を連れた男は、敵方のもとと疑われて、捕らえられて拷問を受ける。妻と子は父が死んだと聞いて川に身を投げる。許されて戻った男は妻と子の死体を見いだして、後を追って川に身を投げる。

このような、戦乱によって苦しむ非戦闘員の詳細な描写は「平家物語」には見られないものである。それは、先の戦争を厭う思想に対応する文学的表現といえる。

もちろん、「太平記」全体が厭戦思想によって貫かれてるわけではない。さらびやかな鎧、兜に身をかためた武者の勇壮な出陣姿の描写もそこにはある。保元物語、平治物語では武者は意志の力によって新しい世の中を切り開く積極的な存在としてさっそうと登場する。りりしい武者姿の詳細な描写に裏には、武士の世と、彼らの習いである合戦を肯定的に捉える、作者、及び読者の態度がある。

こうした、戦士の英雄的な風貌と行動を肯定的に描く文学は世界の東西を問わず、古代、中世を通じて普遍的に見られる。王族、貴族、僧侶、そして騎士階級が文化の担い手であり、文学の享受者であるところでは、騎士の武勲は文学の主要なテーマである。

さらに「太平記」では、中国の儒教的な善政の羅列の後に、仏教の因果による、この世の飢えの説明がなされる。前世において他者を飢え、苦しめたものは、この世で飢えに責めさいなまれる。この世においては、それは救うべきがないものなのである。これは、まさに朱子が仏教の出世間的態度が、現世の社会悪を放任している、とその無責任を論難したその当の思考様式である。

中国、朝鮮においては、儒教を指導理念とする士大夫が、唯一の支配層であり、文官の彼らが政治権力を独占し続けた。最終的には皇帝、国王を頂点とする官僚機構が民生に対して

責任ある唯一の機関だった。この士大夫層の良心のよりどころとして、杜甫の文学は尊崇されたのである。これに對して、日本では政治権力は公家、社寺、武家の間で分割され、最終的な責任の所在は不明確であった。政治理念も、中国、朝鮮における朱子学のような統一的な指導理念、すなわち、社会正義を自分達こそが担っているという自覚を支配階級に与えるようなイデオロギーが欠如していた。太平記の宋学的な善政待望論と仏教の宿命論の混在は、日本の社会状況の多元性、あるいは無政府状態の反映といえる。

戦国期の戦争の記録は太閤記、信長公記のような歴史物語を生み、大衆の人気を博したといっても、それらは平家物語のような美学を産み得なかった。同時にこれらは戦国大名の武勲をかたる佐筆の記録をもとにしているために、戦争の悲惨や、民衆の苦難といった視点をまったく欠いている。平安末期から戦国時代にいたる日本の動乱は武士階級の覇権をもたらしたが、中国、朝鮮では武官はまったく政治の表舞台にたつことができなかった。このような社会状況の相違は、日本において、中国の士大夫の文学を理解させることを著しく困難にしたのである。

江戸時代、朱子学が官学とされ、漢文学もひろく日本の武士階級に普及した。こうした朱子学的な平和思想をもって文禄、慶長の役を評価すると、太閤記や朝鮮征伐記といった武

勲談とはまったくことなる、戦争の描写が行われる。

雨森芳州は、文禄、慶長の役の日本軍の快進撃にはいっさいふれず、戦死者が野を埋め、老弱男女が戦乱に塗炭の苦しみをなめる有様だけを述べている。

しかしこのような戦争観は確かに儒者によって信奉され、徳川の平和の思想的基盤となったが、完全に日本の支配的な思潮となったのではない。江戸時代の支配階級はあくまでも武士であり、戦闘そのものを美化する武勲談は、相変わらず多くの読者を持っていた。

徳川後期の漢文学で最大のベストセラーとなった頼山陽の「日本外史」は、杜甫を含む中国文学に精通する作者の手になるが、その叙述は北条、足利といった氏族の争闘の連続である。単純化して言えば、中国の歴史記述が短い動乱と長い平和であり、叙述の眼目がいかにこの平和を統治したかという点にあるとすれば、「日本外史」の描く歴史は競争と戦闘の連続であり、つねにダイナミックに揺れ動くものである。

儒教的な歴史記述においては、戦争は悪政の結果であり社会悪の典型であるが、日本外史においてはそうではない。氏族間の争いが歴史の常態なのである。この日本外史が当時の読者に広く迎えられたことは、芳州のような戦争否定の歴史観が日本の知識人の間でついに普遍的にならなかったことを逆説的に示している。

明治日本は、日清戦争、日露戦争という二つの大戦争を経験した。二つの戦争はそれぞれ無数の戦争に関する文学を生んだが、杜甫の作品に比較できるような思想と文学性を有すると思われる作品は与謝野晶子の「君死にたまふこと勿れ」と「石光真清の手記」である。

与謝野晶子は、公式記録や新聞報道や歴史の記述とは別な所で、その時代の国民の情念を詩のかたちに表示し得たという点で、明治の詩人のなかで、国民詩人の称号に最もふさわしい文学者である。日露戦争という国民の人力と富力の全てをつくした国家的事業に対して、その真情から否定の声をあげたのである。

日露戦争は、侵略的なロシアの南進を防ぐという大義名分を有する点では、国際的な支持をも得た戦争であった。それゆえ旅順要塞の攻撃の余りの人命の損失の大きさに衝撃を受け、不満を抱いた国民は多くとも、これだけ直載にその感情を吐露できた表現は他にはなかった。日露戦争というものが、国際政治とか、日本の国家利益とかいった観点とはまったく別の、個人の家庭生活の破壊という視点から見ることができるとし、またそうされなければならないということを、晶子は敢然と詩に歌った。杜甫の詩の主題とそれはまったく符合している。

明治維新は王政復古というスローガンを一方で持っていた

が、国民と戦争という観点からいえば、この標語は妥当である。律令制においては、軍制は徴兵制であり、国家が全ての人民を戦争に徴発する権限を持っている。それに対して西欧や日本の封建時代の兵は、騎士、武士であり、国家の軍隊ではなく、私兵である。戦争に参加できるのは、騎士、武士の特権であった。ヨーロッパの「ロランの歌」のような武勲の叙事詩や、日本の平家物語が、戦争に於ける庶民という視点を持たないのは、こうした封建諸侯による戦争が庶民を除外して行われていたことを、一面、反映している。

近代国民国家の形成によって初めて国民全部を巻き込んだ徴兵制による戦争が、ヨーロッパでも日本でも現実のものになった。庶民を搾取し苦しめるのは特定の個人や特定の氏族ではなく、国家であり、社会全体の構造そのものである。

このように明治維新は、日本に約千年ぶりに個人や家族を国家と直面させる社会状況を生み出し、個人、家族の視点から、国家の悪、戦争を告発する文学を生むことになるのである。

石光真清は日露戦争、シベリア出兵をはじめとする多くの戦役に参加した軍人であるが、彼の詳細な戦争の記録が、庶民の生活という視点から行われているのは印象的である。石光真清は征台の役の記録の中で、彼の連隊が拾った女の子のことを詳しく書いている。彼女の母は銃を手にし、旗を背負っ

て死んでいたのである。この記述によって我々は、征台の役が女性まで抵抗に参加した凄惨な戦いであったことを知らされる。また女性や子どもに焦点をあてることで、戦争によって常に被害者のがわに立たされる弱者の視点から、戦争を捉えているのである。こうした視点こそ、杜甫の文学の特色であった。石光は陸軍士官学校を卒業した職業軍人であったが、その石光がこのような「視点の低い」戦争の描写ができたのは、かれが幼い頃に身につけた漢文学の教養によるのではないだろうか。

石光は、日露戦争には第二軍の副官として参加している。その彼の戦闘の記録と、公式の戦争の記録として出版されたものを比べてみると、大きな隔たりがあることがわかる。公式の戦記の講評はこの戦役は「連戦連勝の」完べきな戦いであったとする。石光は戦闘の困難な状況をつぶさにしるし、さらに戦争の終わったときの前線の兵士の最初の言葉が、「いったいどちらが勝ったのだ、日本か、ロシアか」というものだったことを伝えている。公式記録は、日本軍の悪戦苦闘の模様を多くカットしてしまったのである。

この問題は、文学と検閲という古くて新しい問題をわれわれに示している。杜甫が「兵車行」で行ったのは前線の将軍達の虚偽の報告によって覆い隠されてしまった戦争の真実の姿を告発し、後世に伝えることだった。石光は戦争批判の言

葉をほとんど漏らさないにも関わらず、かれの伝える戦争の現実が、大日本帝国の進路の誤りと、歴史記述の粉飾を告発しているし、その表現は文学とよびうる水準に達している。

明治日本は、近代文学と近代の報道のシステムを導入したが、また同時に文学の表現を検閲という手段によって大きく制限し、さらには文学の大きな源泉となるべき各種の記録にも加工を加えたのである。石光の記録は諜報記録という本来闇から闇に葬られるべきものであったために、逆に大きな真実を我々に伝えることになった。このことは、逆に他の近代日本文学全体が検閲を経て、また検閲を予期して書かれ、世に出ていることを想起させる。日本の近代文学を考える上で、次の永井荷風の太逆事件に関する告白は、大きな意味を持っている。

私は江戸末代の戯作者や浮世絵画家が、浦賀へ黒船が来ようが桜田門で大老が暗殺されようが、そんなことは下民の与り知ったことではない。――否、とやかく申すのはかえって恐れ多いことだとすまして春本や春画を描いていたその瞬間の胸中をば、あきよりはむしろ尊敬しようと思ひ立つたのである。

十九世紀は、国民国家形成の時期であり、また国民を巻き込んだ総力戦の時代であった。戦争と国民という主題は文学の大きなテーマとなった。ヴィクトル ユゴーや、ホイッ

トマンといった詩人がその故国において、「国民詩人」的な地位を得ているのは、まさにこの主題を自分自身の課題として取り上げたためではなかったか。しかし我々は、千年以上前の中国において杜甫が同じ問題にぶつかり、その詩によって国民の戦争に対する思いを代弁した事を行っている。戦争

杉本 以上で上垣外さんの発表が終わりました。一応石光真清、大正期までの文学と社会の問題を具体例をあげてふれた形になっておりますので、この後、ミコワイ・メラノヴィッチさんにコメントをしていただきます。

メラノヴィッチさんは、おそらくそれより以後の昭和の文学と社会につ

メラノヴィッチ 上垣外さんは、中国や朝鮮と日本の例を取り上げて文学の本質とかかわる重大な側面を考察されたと思います。

文学における戦争や貧困という諸問題は、重大な問題です。歴史的な展開を追って、中国の有名な杜甫からはじめて日本のあまり知られていないような石光真清の手記で一応終わります。その通時的な立場を、共時的な考察と取り合わせて、わかりやすく、簡潔にご発表だと思えます。特に、いわゆる庶民や窮民の目の立場において文学をつくり、記録をするということに注目された点に興味を覚えました。その論文の中に、私にとって二つの大きな発見がありました。

その発見の二つの中には、三善清行のこと、今日お話しませんでしたけれども、もう一つは石光真清のことです。多分いままで出た文学史の中で書かれてないと思います。上垣外さんが、雨森芳洲の意義の発見者

と文学という問題は、国家が形成されたその時から、普遍的な問題であったのである。我々は、同じ問題を抱えた近代日本の文学を、国家、社会、そして戦争と文学との関係から、もう一度、検討し直す作業の入口にいたのである。

いてコメントなさるかと思っています。

それを聞いた後に質問、そして討論に入ります。

では、よろしく。

とも言えると思います。

戦争と文学という問題は、国家が形成されたそのときから普遍的な問題になったと指摘されたわけですが、そこで連想されるのは、国家形成のずっと前のホメロスのイリアス、あの二七〇〇年以上前の叙事詩に戦争と文学の問題はみごとにあらわされていると思います。

もちろん英雄を中心とした文学ですが、古代ギリシャのヘロドトスは、イリアスやオデッセイアでは自由民一般を示したようですから、両叙事詩は貴族などの物語とは限定することはできないと思います。

古代において、英雄文学が人を楽しませるために作られるようになって、ほとんど国や国民の中で英雄讃歌や英雄の死に際しての鎮魂歌、戦闘歌だった詩などが作られていたわけですが、それらには野蛮な、残酷な行為の描写があまり見られません。理由は、英雄が主に宮廷や身分

の高いほうの人々を含む聴衆を相手にして行われたからです。ですから、窮民の声はそういう文学にはあまり残っていないわけです。

古代中国の杜甫、日本の三善清行における庶民の貧困の文学的記録は極めてまれなものであって、なおさら発表者の指摘が貴重であると思います。また、杜甫のうたった戦乱の中の人間の苦しみや、山上憶良の貧窮問答は、その二人の優れた詩人によって経験されたようであります。飢えた人間、死んでいく人間を見届けてうたったようです。そういう例はまれであることを言いましたが、実際は戦争や貧困の主題はそれほど乏しいものではないと、今日の発表でよくご指摘なさったと思います。

ただ、書く方の視点が違いますね。取り上げられた「兵車行」という長詩などでは、悲惨な状況が地平に近い視点から見られるでしょう。イリアスや平家物語の場合は鳥瞰図に近いような、寓話性に富んだ物語方であるように思われます。実際に語られる武士や貴族が階級的に扱われているというより、もう少し次元の高い、形象化された主人公たちとして見られています。平家や太平記の場合、両者の間に多少の違いがあっても、戦争という人間の置かれている極限状況が象徴的に、無常思想と結びついたものとして強烈に表現されるのです。形や装飾の影に、武士や庶民の体や心の苦しみがかがわれるのです。

ですから、日本古典文学において、戦争や貧困を一番すさまじく表現されているのは、平家物語と太平記ではないでしょうか。江戸時代の場合は戦争を題材にした優れた作品があまりないようですが、貧困をめぐって表現した作者は少なくはない。今昔物語や宇治拾遺という説話の伝統を受け継いだ井原西鶴や十返舎一九などは、生々しく真剣ではなく、距離を置いてよく笑いやユーモアを表に出して、庶民にとって満足できない世の中の状況を語り続けました。その観点から、小林一茶や、橘曙覧なども登用してもいいのではないのでしょうか。人間くさい庶民生活も充分にうかがわれるわけです。

明治以降も、最初に話してくださったとおり、激しい戦争が頻繁にな

るにつれて、明治以前には非常に弱かった戦争文学という系統が、特に昭和期には主流の一つになったと言ってもよいと思います。

戦後になると、戦争文学の用途、その社会的意義が高まり、小説だけではなく詩や演劇にも重大な作品が生まれたことはご承知のとおりです。

私の翻訳者としての経験では、私は日本人の戦争というより戦争をしなければならぬ人間の姿が書かれているのを、梅崎春生の「桜島」や竹山道夫の「ビルマの竖琴」大岡昇平の「野火」野間宏の「真空地帯」大江健三郎の「飼育」遠藤周作の「海と毒薬」井伏鱒二の「黒い雨」島本敏雄の「出発は遂に訪れず」などのさまざまな作品の中に見出しました。

そういった作品では、英雄談がどこにも見られません。それはあたリまえのことですが、戦時中の英雄談風なテキストはとくに忘れられたので、たくましい戦いはむなしい努力として書かれるようになりました。なおさら強いられたい人たちが、だまされた人たちが文学の主人公になった。戦争と人間との関係を多角的に取り上げて、極限状況に置かれた人間の心理、思想、道徳、欲望などを見つめた作品が作られています。その中には、以上に述べたような傑作も生まれました。

それらを振り返ってみますと、ひねくれた疑問が浮かばないとは限りません。すなわち、それらは敗戦者の文学でしょうか。負けた侵略者の面影のある文学でしょうか。自国の残酷な独裁者が倒れた喜びを表現した文学でしょうか。そういった質問に答える必要はないかもしれませんが。読まれるテキストが文学作品である以上、そういうやっかいな問題は文学論とは関係ないでしょうが、ただ侵略者の遺産、そういう心理的、倫理的な遺産はどこかに作家の心のしかかっていたのではないのでしょうか。

自国の軍隊などの手によって苦しめられた犠牲者の立場から描くとか、または他国の窮民に対して行った残虐の理由を深く掘り下げて、さぐり

ぬいた作品は、日本の文学の中でどのくらいあるのか。あるとすれば、問題にされていないわけです。もちろん自国の軍の残虐を暴露する小島信夫の「小銃」や、遠藤周作の「海と毒薬」などのような作品があることは見逃してはなりません。他国の罪のない人々を苦しめるためにどうして権力者でもない普通の日本人があんなに従順に協力したか。それがどの程度に文学には追求されたのか。答えは日本の文学者が与えてくれるはず。ともかく戦後派の作家が、戦争責任の問題をおおまかに追求しようとしたことは忘れないことです。

一方、たとえば朝鮮の作家の描写する世界では、朝鮮半島の両国のことですが、少なくともいくつかの点がはつきりしています。すなわち、自分の国を守るために戦うこと、それに敵が外部からやってきた闖入者であること、その違いがどこかで文学的な創造力を限定しているとも思えます。

日本現代文学の場合は、心理的にも倫理的にも、戦場や戦争を起こした人々を描く場合、何か得体の知れないような理由で曖昧な態度を選択させたように思われます。思想的な価値判断を鈍くさせるといふか、責任感のわきまをほとんど不可能にしてしまうようですね。一体何という力が責任体制を乱したのでしょうか。だから、戦争も、台風や地震やらと似たようなものになってしまっています。苦しみや貧困をもたす要因が、どこか人間の及ばないところにあるように思われる図になるわけですね。

ポーランドの戦争文学にははっきりと、戦うための妥当な政治的な、道徳的な、覆したい土台があったといえます。また残酷や苦しみをもたらしたのは紛れもなく、西や東の大国の兵隊や憲兵でした。そういった敵に対する戦いにおいて愛国心がよく奇跡を起こしたりしました。根強い愛国心を文学が養ったことも確かです。ローマン主義的騎士道に基づいた勇気が、高く評価されたことは不思議ではありません。そのような英雄談の流れも消えませんでした。

しかしこうした構造にも、政治的な、思想的な矛盾が染み込んでいました。国を解放する闘争は戦後にも続けなければならなかったということです。アンジェイフスキ J. ANZELJWSKI の「灰とダイヤモンド」やボロフスキ T. BOROWSKI の「アウシュヴィッツ、死の収容所」や、ブラトネイ E. BRATNY の「コルンブスたち」などは、そういう複雑な、また恐ろしい運命をよく表現しています。またソ連軍や秘密部隊によってもたらされた悲劇はもう一つの文学種類の題材になりました。それは極限状況である収容所に追いつめられた、ソ連と闘わなかった、無実の罪に問われた人間を描く記録文学です。虐殺されたポーランドの将校たち、1ーその当時のポーランドの知識人の半分以上だったかも知れない人々たちの運命をたどる記録文学もあります。今日にも新しい作品は生まれてくるでしょう。

それらは全体の価値観を疑わなければならなかった、西洋に集積されたヒューマニズムの伝統をも疑惑の眼で見なければならなかった、極限状況の人間を描く文学でもありました。しかしながら、そのように虫けらのように殺されていく人間のおかれた状況の中からも英雄たちが生まれる可能性もありました。ほかの囚人を救うために自分を殺してもいい、という選択をとった人も出て来ました。(コルベ神父) また、自分が行かなくてもいいときに、子供達とともに死に向かって行ったあの老人ドクターコルチャック (KORCZAK) もいました。勝つ見通しのない戦いを三ヶ月続けたあのワルシャワ蜂起の若者たちもいました。(映画「地下水道」参照)

今日のこのシンボジウムの大きなテーマに関して、一言で終わらせていただきます。文学にあらわれた戦争と貧困という主題を扱うにも、その国や民族の歴史と突き合わせなければ、その文学の源泉や社会的機能が理解しがたいのです。読者を感動させる力もわからないのです。日本の文学を外国に紹介するにも、それが非常に大事な問題だと思っています。文学は空間的な主題を扱っても読者を感動させるとは限らないのです。

文学はそういう定義したいものであって、生き物のようにいつも動いています。いつも再生しています。いつも民族とその社会とともに生きています。生きる意義を模索する人間の表現であるわけです。表現の仕方の教科書でもあります。明るい楽しみ、または苦い楽しみの源でもあります。それだけです。ほかの力はありません。もしかしたら、映像文化が重視されるころには、文字の表現の力も無視され、衰えていくかもしれません。そんな危険性があるとよく指摘されるところです。

杉本 以上でメラノヴィッチさんのコメントを終わりますが、文学に何ができるか、また文学だけの領域はどこにあるのかという、またこれも大きな主題のほうに最後は話がいったようです。

以上の発表、またコメントを踏まえて、他の方からのコメントをいただきたいと思っています。

リーマン 上垣外さんがご説明してくれた第二次大戦の前の時代の戦争の体験ですけれども、普通はやっぱり、二次大戦の体験はちょっと違う次元の戦争の体験になるのです。人間がそのときまでは全然体験しなかった、違う次元の戦争体験になる。それは特に日本人が体験した原爆の体験です。

つまりウェットン・ブレイクがアウシュビッツで見たときは、恐ろしいことを見るとその後だれも詩を書くことはできないんです。 Auschwitz, No body will be able to write as a poem. そうですね。

私は井伏専門家ですから、やっぱり「黒い雨」のことをいろいろ研究して、作家自身から次のような言葉を聞いたんです。井伏先生は、こう言ったんです。「この小説は失敗作だ。なぜかというところ、被爆者の沈黙をあらわすことはできなかった。その恐ろしい沈黙を表現する、言葉にする作家の力がなかった」その問題はどのおおしいになりますか。文学に残る言葉の力、そんな恐ろしい事件のあとでの新しい経験をあらわすのに、文学はまだ言葉を持っていくんですかということをお聞きしたいのです。

でも、人間が生きている限り、退屈なときも、孤独なときも、文学にも救いを求めることでしょう。文学だけではないですね。特に大事な価値が奪われたときに、人間は自分の不安や抵抗精神を文学に託します。本当に安定した、平和で自由な、豊かな世の中がやってきたときにこそ、文学は要らなくなるかもしれません。

どうもありがとうございます。

上垣外 メラノヴィッチ先生のコメントの中で私が一番印象的だったのは、戦争というものが台風や地震と同じになってしまおうとおっしゃいましたね。つまり戦争に対する責任というものをいい加減にしている。それなんです。私が、日本文学で戦死した人の姿というのをなぜ描かないかというのは、そういう感じ方かもしれないからあるんじゃないかということを、日本文学と戦争ということを考えたときに思っただけです。

なぜそう思っただけかといいますと、ご承知のように杜甫の詩では死んだ人の白骨が散乱している。そういう死体を描くのですね。日本の仏教文学では死んだ体が腐って骨になってと書くんですけども、戦争を書いたところにはそういうのは出てこないんですね。どうしてだろうと私は思っていたんですが、太平記の一節を読んでわかりました。そこにはこう出ています。最近台風か地震、自然の災害がしきりに起こるというんです。これは死んだ兵卒、亡卒たちの亡魂、幽霊ですね。亡霊のたたりであるに違いないということ、いろいろな供養をしたところ、これがやんだと言っているのです。

日本人、少なくとも太平記の時代の武将とか貴族とかの感覚というのは、戦死者というのは亡霊になっているんです。この亡霊のことというのは、江戸時代にはたいへん怪談という形ではやりますけれども、それ以前の物の怪とか亡霊というのはあまり言葉にあらわしてはつきり書くべきことではなかったように思うのです。つまり、江戸時代の怪談の流行というのは、一つは中

国文学の影響ということもあるわけです。日本人というのは、戦争の災害と
いうのをあまり書かないということは、実は台風とか地震の災害をあまり文
学の題材にしないということと同じレベルで考えていたのではないかとい
うことを、私はそのとき思っただけです。

それはリーマン先生へのお答えに半ばなっていると思うんですけども、
死んだ人はまだ死んでないですね。亡霊になって生きているわけです。井
伏さんの言い方であれば、被爆して死んだ人たちも、杜甫の詩は泣いてい
るんですけども、沈黙、黙っているわけです。それを生きている文学者が言
葉の形にしてあらわすのは一種の冒涇だというような意識が、あるいはある
のではないかというのを、私は太平記のその一節を読んで思っただけです。
私はこうだと結論は出したくないんですけども、そういう考え方があるの
ではないかというのを思いました。

非常に恐れ多いものを書かないというのは、たとえばヘブライ語の聖書は
神という名前うあらわさないわけですね。それから中国では皇帝の諱（いみ
な）というものがあって、皇帝は非常に尊いものですね。ですからその名前
を直接呼んではいけない。これはタブーなんです。日本人が戦死者のことを
文学にしないというのは、ちょっと弁明めきますけれども、死せる魂に対す
る恐れ、たたりを恐れるというか、恐れのお持ちがどこかにあるんじゃない
か。

もちろん、たとえば能には亡霊がいっぱい出てきますし、いろんな反論は
できるかと思いますが、僕は井伏さんがそういうふうにして死者の沈黙と
いうのをついに表現できなかったという言葉の裏には、そういう死んだ人の
魂に対する畏敬の念がやっぱりあるように思うんです。

饗庭 いくつか質問があるんですけども、いまの問題から言いましう。
井伏さんの「黒い雨」という問題は、たとえば彼がその前に「青ヶ島大略記」
を書いていますね。これもやはり火山の爆発なんですね。それから「御神火」
というのを書いていますね。これも噴火なんですね。「黒い雨」の分析をする
と、その方法はまったく同じなんですね。逆に言うと「黒い雨」も「青ヶ島

大略記」も、「御神火」も、自然の天変地異の問題と同じ視点でとらえている。
だから「黒い雨」が我々に与える感動は、個々の死者の問題よりも、群とし
て、彼の言葉を借りると、天変地異の折檻を受けているわけです。その折檻
を受けるという視点は非常に大事だという気がしますね。

いまの問題について、今日のご発表の中で戦争ということと庶民の描き方
ができていくかどうかということがあったんですが、ちょっとこれは混在し
ているんじゃないかという気がしています。たとえば二十四ページから二十
六ページにかけて書いてあるのは、慈田が中心なんですけれども、ここでは
あんまり戦争は出てこなくて庶民の生活があまり描かれてないということを
言われているんですね。

この問題を考えてみますと、たとえば新古今集の中にも入ると思うん
ですけども、西行の中に、瀬戸内海の小島に行ったときの庶民の生活が書いて
ありますね。この庶民の生活がただ書いてあるだけじゃなくて、そこにある
問題として言えることは、「殺生戒」という問題があるわけですね。殺生戒と
は何かというと、仏教では殺しちゃいけない。ところがそのように西行は守っ
ていたところ、彼は小島のあたりの漁民の生活を見ると、殺生戒を犯してで
も生きていかなきゃいけない。これに西行は非常に大きな衝撃を受けている
わけですね。

それはただ描写の問題だとかそういうことではなくて、自分は仏に仕える
身でありながら、殺生戒を信じていたところ、漁民はそういういったものを
食べなければ、あるいは取らなければ、そこから食べる糧を得られなければ
生きていけない。これはつまり、西行の大きな衝撃であつたし、それに対し
て自分が内面化するかという問題があつたと思うんですね。

そのことと、たとえば五月雨なんかがあつて、雨のことをただ詠うのじゃ
なくて、それから後、水がなければ彼らは田植えができないわけですね。そ
ういったことを描いているわけです。こういう問題を見過ごしてはいけな
いんじゃないでしょうか。

もう一つは、確かに古今集とか新古今集とかいろいろありますけれども、

もっとベースをつくっているものを考えなければいけない。たとえば、古今著聞集であるとか、説話ものがありますね。大事なのは往生伝なんです。こういうところというのは全部庶民のものなんです。彼らはそういったものを読むのは、自分たちの生活が苦しいからです。だからこそいかにして往生し、いかにして仏の道を求め得るかというのが、つまりこのテキスト全体を満たしている庶民の生き方、こういったものがあるわけです。そこから発想していかなければならない。つまり、きれいな事の上澄みをすくったってしょうがないじゃないかと思えます。

ラフルーワ 私は、饗庭先生と同じように新古今時代についてちょっと話したいと思えます。

西行の場合ということになりますと、西行自身が戦いについて和歌三つぐらいいを書きました。やっぱり保元から以後、都は貴族たちが戦いにかかわったんですよ。目の前に戦いがある。しかし、和歌の世界に戦いを詠むことはタブーであったということは、この時代の問題になったんじゃないかと思えます。

なぜなら、藤原定家がその問題をちょっと取り扱って、和歌と戦争と関係ないということを判断したんです。やっぱり定家は和歌の神さだったので、そのときからそのタブーが強くなったんじゃないかと思えます。それはある意味において日本文学にちょっと残念なことではないかと思えます。やっぱり西行の三つぐらいいの戦いについて和歌をうたったことは、その時代の例外だったと思うんです。それを問題として取り扱ったんじゃないかと思えます。饗庭 三島由紀夫が新古今をさして、その間に平家の滅亡がありますね。それをさしてどう言ったかという、地獄を見た優雅さだと言っていますね。新古今の美学を、我々は、言語のレベルだけで考えるのももちろん大事ですけど、その根底に地獄があったわけですね。その中の一つとして、建礼門院右京大夫の歌集がありますね。建礼門院は宮廷生活をしているときはさほどでもなかった。平資盛を平家の滅亡の壇ノ浦で失ってから、彼女の存在の根拠になりますね。戦争というものが人間の内部に入って実存を形成するま

でのものを、やはり戦争文学と僕は考えたいわけですから、ただ経験を書くものだけが戦争ではないでしょう。

上垣外 実はここに大原富枝の小説ですけれども、「建礼門院右京大夫」というのがあります。その後書きを読んでいるかという、こう書いている。

大原富枝はどのようなところにそこで書いているかという、こう書いている。「資盛の運命は、第二次大戦に死を覚悟して出陣した学徒兵たちの心情に重なりあい、彼女の歌集は彼らに愛読されたと申します。右京の思いは、この戦争で、この戦争というは太平洋戦争ですね。『この戦争で愛する人を戦死させたたくさんの方たちの思いと重なるものでもあるでしょう。』このみぎわ、夫の眠れる海のはて、帰らぬ息吹を求めてをさる『京都、松下としえ。』恋に恋て、心阿修羅となれる日は、遺影も遺品も捨てなと思う『仙台、堀歌子。朝日歌壇にこの種の歌が絶えず載っているのを見ます。私自身、ある人の戦死をいまでも胸に刻んで生きており、それがこの作品を書くモチーフともなっています」

饗庭先生がいまおっしゃったことなんですけれども、大原さんはまさに自分の戦争体験と「建礼門院右京大夫集」の歌の世界を重ねて読んでいた。ラフルーワ先生がおっしゃった西行のことですが、私も気になっていまして、やはり西行はあそこで一つの破格をやったと思うのですね。饗庭先生があげた説話の世界というたくさんさんそういうのがあるんですが、やっぱりタブーだったのではないかと思うんです。たとえば万葉集ですと、貧困に関する歌、万葉集にあつてあとのないものと考えてみると、大伴旅人の酒の歌ですね。お酒をあまり歌わないのじゃないか。これはタブーなんじゃないでしょうか。戦争もそうですね。万葉集には戦争を直接うたわけても防人の歌のような戦争に徴発されていく民衆的な立場の人の歌があります。どうも、古今集以後の王朝の和歌の世界では、やはりお酒もどうも歌にはふさわしくない、戦争も歌にはふさわしくないというような、取捨選択、歌の世界というのはこれをやるものだという、花鳥風月というのですか、規範がだんだんできていったのではないか。やはり西行はそこで源平の戦いというも

のに遭遇して、そのことにぶつかったと思うのですね。多分西行自身も戦争のことを書くときは、これは破格をやっているのであるという意識は持っていたと思うのです。

中世の連歌の世界でも、定家の線というのが一つの規範になってしまいましたが、連歌がいくら地下のものに降りていったとしても戦争というのはなかなか入ってこないと思うのです。ないんじゃないだろうか。

もっと不思議に思ったのは、説教節なんですね。あれは庶民の心情をうたった文学で、階級的に「山椒太夫」でもそうですけれども、人買い、つまり奴隷の主に分たちが苦しめられた。そういう上の者からいろいろいじめられた、苦しんだという苦しみはあるんですけれども、戦争で苦しんだというのはないんですね。なぜないんだろう。あつていいんじゃないかと私は思うんですけれども、やはり何か戦争のことは文学の題材としないという意識はどこにあるんじゃないかと思います。

私の知らない日本文学はたくさんありますから、いっぱいあるのかもしれないですけれども、そう思います。

山口 上垣外さんのお話は、非常にダイナミックに鋭い問題を出しておられるわけですが、扱われた範囲では大体士大夫の中国の意識の中から出てくる戦争とか貧困とか、そういうものに対するフレキシブルな視点、それが普遍的な視点につながっているという問題と、たとえばメラノヴィッチ先生のお話に出てくるような西欧の文学というの戦争に対する視点というものにはキリスト教があるけれども、仏教というものがそういったものに対する、どういう視点を提供するかということではないいろいろ問題が出ているんじゃないかという気がするんです。

たとえば「マハーバーラタ」みたいな作品、あれは戦争のことばかり書いていますけれども、これはハステイナープラともう一つ対抗のインドドラプラスタという2つの家のことで、戦争そのものの悲惨さを書くけれども、それに巻き込まれたものの悲惨さというのは全然描かれていない。ただサンスクリット、ヒンズー教というふうなものがその背景にあるという問題もある

のかもしれないと思うのですけれども、戦争文学としては「マハーバーラタ」は東南アジアまで巻き込んでいますから、戦争演劇というか、叙事詩というか、

定義不可能なところがありますけれども、そういうものが今後射程にはどういうふうに入っていくのか、それが一つなんです。

あと二つコメントしたいんですが、一つは珍しいことに能の中に、上垣外さんの視点を非常によく裏付ける曲が入っているんですが、それは平家の武将に子供を殺された母親が恨みごとを述べる。その武將は、漁師の若者に、浅瀬なんかを知っているから案内させた。ところが案内させた後で、よくあるように、戦略上不利になるというだけの理由でその若者を殺してしまった。そして水に沈めてしまった。母親が出てきて、それに対する恨みごとを言う。あれは、恨みごとのように見えるけれども、状況としては戦争に対するある種の、しかも女性の視点というのが、能の中にすくいあげられた。あの能はどういうふうにして曲が成立したか私は知らないんですが、お話をずっと聞いていて、まずあの曲を思い出したわけなんです。

それから、明治の文学において、私も昨日ナショナリズムというふうな関心を申し上げたんですが、絵画の歴史においては比較的戦争の問題、貧困の問題というのは浮上したというケースがあると思うんですね。たとえば貧困の問題で言いますと、平民新聞の付近にいて協力していた寒村の自伝そのものが文学作品として読まれば、あれはそういう意味では非常に層の厚い文学を形成していると思うんですが、画家で小川芋銭という後に河童のことばかり描いていく人が、平民新聞の掲載した前後にはまちの貧困を漫画というジャンルの中でどんどんスケッチしている。だから漫画のダイナミズムというのは今日いろいろ問題になっていきますけれども、何かあのときに一つそういうふうな問題が、可能性が出ていたんだと思うんです。

同時に与謝野晶子をあげりましたが、ちょうど並行して、ちょっと私昨日コメントで申し上げたんですけれども、国木田独歩の「戦時画報」の特派員に採用されて、それで日露戦争に参加した小杉未醒ですね。のちに放庵と

名前を変えるけれども、この画家は新体詩で要するに戦争のみじめさというものを非常に自然な気持ちで描いていて、あれは与謝野晶子と対比する人は対比するんじゃないかと思うんですが、対比されている例を私はあまり知らないんですけれども、それは五編か六編書いていて、私、もし発言するつもりだったらコピーでもしてきたと思うんですけれども、そういうふうな用意もなかったものですから、いま具体的に例をお読みすることはできないんです。

それと同時に小杉未醒は従軍画家としていながら、カラスに死体をついばまれるロシア兵に対する共感をこめた視点が、日本兵のみじめさとか、戦争の状況の中における人間のみじめさというのを絵において描いている。小杉未醒というのは、当時の作家というのは筆の力が非常にありましたから、随筆を書いて非常に水準の高い随筆を書いた。

ところがそういう可能性がだんだん失われていったというのがもう一つの問題で、大東亜戦争における戦争画というのは、田中比佐夫さんという人が「日本人と戦争画」という研究ですつと系譜を明らかにしておりますけれども、何か明治においては石光真清を含めて、それを士大夫意識の江戸を経過した明治版だと言うかどうかは別として、異質な、一般に日本のものをつくる人間、その後の人間と違ったところがあったのかどうかということを、私は考えているんですけれども。

上垣外 ここにいらつしやらないですが、客員でいらつしやっているインドのビシャナタン先生が読まれて、僕に「マハーバーラタ」のお話をされたんですね。私はちゃんとした「マハーバーラタ」の読者じゃないんですけれども、「マハーバーラタ」の戦争というのはルールのある戦争だった。こういうときには戦争をはじめてはいけないとか、この時間には戦争をはじめてはいけないとか、いろんな戦争のしきたりがあつて、これを破る人は武将としても悪い人なんだそうです。それはやっぱり平家物語のような騎士物語の戦争に近いんじゃないか。つまり、戦っていても、確かに戦争なんですけれども、一面スポーツみたいなルールがあつて、約束があつて、それを守らないとアン

フェアだと言われる。そういう世界は平家物語にあると思うのですね。もつと「マハーバーラタ」とか注意して読まなきゃいけないと思ったんですが、まだ忙しくて手がついてないんです。

これは野口武彦さんの「江戸の兵学思想」から教えてもらったんですけれども、获生徂徠が朝鮮での文禄・慶長の役のときの戦争のことを書いているのですね。彼は文禄・慶長の役は日本は負けたと思ってるんです。なぜ負けたかという、日本のほうは戦国の世といつてもやっぱりお互いの約束ごとというのがあつてルールにのつとつてやっていた。ところが、大明の軍隊というのはそういうのを全然無視してワーツと攻めちゃった。

それで負けたんだということを、野口さんが引かれていた。やはり平家物語の戦争とか「マハーバーラタ」の戦争とか、確かに激しい戦争なんですけれども、源平の場合は源氏と平氏というのは身内なんですよね。天皇から血を引いているという点から言えば、氏族は違うけれどもとをたどれば先祖は一つになるという、どこか身内意識があつて、そういう戦争と、国外の異民族の、言葉も通じない、戦争のルールもまったく違う戦争の悲惨さというのは、やっぱり一つ次元の違うことではないかということは、前から思っていますし、いまも思っています。

国木田独步、小杉未醒あたりは、私は全然未見ですので、不勉強で申し訳ありませんが、勉強してみたいと思っています。与謝野晶子のことは調べようと思つていろいろ読んでいましたら、与謝野晶子のことは大町桂月が国賊みたいな言い方でして、それに開文というので晶子も反論するわけですね。あのときの文壇の雰囲気というのは、やっぱり桂月のほうがおかしくて晶子のほうが当然だというのが大勢だったと、いま残されている記録があるんですね。

日露戦争というのは、戦争をやっている陸軍の人たちはどうか知りませんが、案外に文学者たちというのは自由に、国家目的とかいうことを離れて戦争を見れていたようにも思います。そう言い切つていいかわかりませんが、少なくとも第二次大戦のときの非常に厳しい検閲とかい

ろんな弾圧とかいう状況ではなかったし、多分それ以後、軍も政府も厳しくやろうと思ったんじゃないかとさえ思いはじめているところですよ。

与謝野晶子は、確かにそれで散文詩というか、「君死にたまふことなかれ」では戦争を嫌うという詩を書きましたが、同じ時期の和歌というのうずっと読んでいたんですけれども、明治三十七年、三十八年、どう見ても戦争と関係ある和歌がないんですね。たった一つだけありますが、それは「ほととぎす、治承寿永の御国母、三十にして経読ます寺」これはもしかしたら日露戦争と関係あるかもしれない。つまり、平家物語の建礼門院の世界と、現実の日露戦争で夫や弟が死んでいくというのと建礼門院の立場を重ねて詠んだんじゃないか。そう詠むべきだと私は思いはじめましたけれども、それ一つしかないんですね。

やはり明治の与謝野晶子みたいにいろんな意味でそれまでの表現を和歌の上で踏み越えたような人でも、和歌は戦争を詠まないんだというタブーはあるのではないかというと思いました。文学の中のジャンルによっても、和歌ではこれはやらないんだということで、軍記ものではないとか、説話ではどんな書くとか、いろんな別がジャンル別でもっとていねいに考えないのだめだと、饗庭先生がおっしゃったんですけれども、痛感しています。

芳賀 今日上垣外さんのペーパーを読み、話を聞きますと、戦争と文学という問題のとらえ方としては、ちょっと単純すぎたんじゃないかというふうに思いました。文学は戦争の悪、戦争の被害、戦争による惨害、悲惨、それを描くだけが文学であるというふうに杜甫からはじまって、その観点からだけ文学を見ていった。そのために平家物語も脱落してしまうということになりますし、結局最後に石光真清だけが近代日本における戦争文学の最高峰であるというふうにして礼讃して終わるという形になった。ちょっとおかしいんじゃないかなというふうに思いました。

戦争と文学のかかわり方はもっともいろいろな形がある得るわけで、さつき饗庭さんが三島の言葉を引いて言った新古今、ああいうこともあり得るでしょうし、もうちょっといろんな形を、もうちょっと繊細に考える必要がある

るんじゃないかと思う。戦争をする側の文学だって考えてもいいんじゃないか。石光真清は一方ではそういうこともあったわけですが、それでなかなか優れた文学が生まれたのは確かでしょうけれども、しかし戦争をした側を描いた文学で、さつきから戦後の文学で言うところの「黒い雨」その他だけが上についているけれども、たとえば阿川弘之の日本の将兵たちを語った文学、あるいは「暗い波濤」のような作品、ああいうものも戦争して、結局自分たちもいわず戦争の被害者になっていくけれども、しかしただ民衆の低いレベルからの観点ということだけを強調するのは戦争の全体というか、戦争の非常に大事な点とはえそこねてしまうのではないかと。

上垣外さんはさつき自分のコメントの中で、戦争を正確にとらえるという言葉を使って、石光真清はそれを行っているんだと言いましたけれども、戦争を正確にとらえるなんてことが一体できるかどうか。参謀本部だってすぐにはできないわけであって、まして一介の文人がそんなことでさつきこないじゃないですか。私人がそんなこと、できっこないじゃないですか。

戦争はいろんな面があって、結局はさつきどなたかがおっしゃったように、洪水か地震か、ああいう面もいつまでたっても戦争は人間に対して持っているんじゃないか。今回の湾岸戦争なんかは別でしょうけれどもね。いよいよ戦争の形も変わっていくわけですが、第二次大戦あたりまでは、我々にとってはまだ天地異変とかかなり似たような形で日本人は受け取っていたところがあるんじゃないかと思います。

たとえば短歌のほうでも、斎藤茂吉なんか出てきて、戦争中は非常に戦争賛美の歌をうたって、それが最近つぶさに研究されたりして非常に興味深いんですが、あれも戦争と文学の一つのまっとうなあり方だろうと思います。日本国民として、日本国が国をあげて戦っている戦争に、一歩離れて批判する目ではなかった。まさに庶民の一人としてその戦争を賛美しつつあったている。あれも戦争と文学の非常に大事な面ではないかと思えます。

菱川 だんだん危険な発想に乗り出したみたいになっておりますが、上垣外さんに対する批判に対して、私は違うんだということを申し上げたいと思

ます。

今日の、上垣外さんのご提案の中で非常に大切な点は、戦争の加害者が同時に被害者の視点を持ち得るかという提案だったと思うんですよ。杜甫と石光真清を出されましけれども、二人の立場は決定的に違うと思うんですね。杜甫の場合には一方的な戦争被害者だったわけですが、石光真清については侵略する側の加害者になっているわけです。私、石光真清について詳しく知りませんが、彼は軍においてどれだけの権力を持って、いたのかわかりませんが、まず平凡な市民的な感覚を持っていた人だと思わなければならぬ、それが侵略する側、加害者の側に立ちながら、同時に被害者の視点を持ったわけですが、はたして文学がそういうものを持ち得るのかという提案だったというふうに思うわけです。

ミコワイ・メラノヴィッチさんもおっしゃっていましたが、戦争というのは決して権力者だけのものではなくて、市民や庶民を全部巻き込んでいくんですけれども、他国に対して行った残虐な行為、その行為に対して平凡な人間がどれほど苦しんだのかということがなぜなのかということ提案されまして、これは日本の文学としても根本的に考えなければならぬ問題ではないかというふうに私は思っているわけです。

斎藤茂吉の例も出てきたんですけれども、茂吉も一ぺんにああいうふうになったわけじゃないので、中日事変のときと太平洋戦争のときとはつきり違っております。一介の市民が公的な人間、臣民という意識のほうに変わらされていったわけですね。戦争というのは国家の物語で、物語は文学者だけが書くものではありませんが、その大きな物語に対して個人の物語がどうなっているのか。中日事変のときまでは個人の物語はある程度保証されておりましたけれども、やがて国家の物語に個人が完全に吸収されていってしまう。そしてその責任の取り方はどうなるかというと、自然に向かつてごんげをするということになりますね。なぜ自分がそのような立場に立ったのかということに対しては徹底的な批判が加えられません。

日本人の中には、あれだけ謝っているんだから許してやればいいじゃない

かという、どこかにそういうものがあって、戦争というのは意外に自然観と結びつくというか、日本人の場合には自然が宗教の代弁をしていると思うんです。自然であるとか時間が人間を救済し、あるいは浄化していくというふうな役割を果たしているんですね。

一見何でもないことのように思われますけれども、そういう自然や宗教や時間という問題に、戦争というのを入れてみますと、ずいぶん違った形で見えてくるのではないのか。それからまた、先ほど私が言いましたように、加害者でありながら被害者の視点を持つ文学は、たとえば、歌のほうですけれども、中日事変を扱ってありました「支那事変歌集」と、大東亜戦争を扱っている「大東亜戦争歌集」を読みますと、実際に彼らは戦場に行っているわけです。

国の外交をつかさどっている大臣たちは日本にいても、実際に戦線に行っている無名の人間の立場から、彼らを批判する作品をいくつに残しているわけですね。そういうものというのは、これまでの日本の文学がほとんど見落としてきた部分で、やはりこれは考えなくちゃいけない問題をはらんでいるんじゃないかというふうに、私は聞かせていただきました。

上垣外 お答えします。

私、日本文学が戦争のことばかりを書かなければいけないと主張したいのではないのです。一つ、例を申し上げますけれども、私は韓国に六年前に行っていました、そのときに中国文学全集と日本文学全集と、全部持っていきました。ある日「春色梅暦」を手にして、本当に一気に、一晩で読みました。こんなに面白い文学はないと思ったんです。それは韓国のようなところにいると「春色梅暦」の、芳賀先生好みかどうか、こまやかな人情の世界というのは実に、これは韓国にはないんじゃないかと思っております。

そういうものがあるかわりに、韓国にいて戦争に関するいろいろな文学や話をたくさん聞かれますと、どうも日本は「春色梅暦」のようなこまやかな人情を描いたすばらしいものがある反面、戦争、悲惨を描く文学にはどうも弱いんじゃないか。それはスポーツの種目でも、日本は昔はピンポンが強

くて、体操が強くて、最近みんな負けていますけれども、バレーボールが強かったり、得意な種目と得意でない種目があると思うんです。文学のジャンルの中にもやっぱりあると思うんです。私が申し上げたいのは、戦争の悲惨というものを庶民の立場から書くという種目については、日本の文学者は不得手があったと、認めたいわけですよ。

石光真清が戦争を正確にとらえているという意味は、石光以外にも正確にとらえていた人があったかもしれないけれども、私は石光真清の日露戦争の記録を読みたいへん興味深かったので、博文館というところから出ている「訂正日露戦史」だったと思うんですが、当時何十版と出た日露戦争の公式記録を読みました。まったく違うんですね。

たとえばごく小さな、僕にとつては一番印象的だったんですけども、奉天の手前の小さな丘をロシア軍が陣地として持っていたんです。第二軍は、それはいついつまでに占領しなきゃいけないというので攻めてくる。ロシア軍が反撃したいへんな激戦になって、死傷者がものすごく出ます。さんざん苦労して着いてみると、石光はロシア語ができるいろいろな調べてみると、ロシア軍はその晩に退却しようとしていたんですね。もしもこのとき日本軍が攻めるのが三時間遅かったら、日本軍もロシア軍も一人も死なずにそこが日本軍の陣地になった。それをやるために、何百人という人が死んでしまったのです。石光はそのことを記している後に「戦機とはこのように微妙なものである」と書いてある。私は、本当にそのことが印象的でした。やっぱりそこには、もしも相手の情勢というのがよくわかっていたら、何百人というのは無駄に死ななかったということがあると思います。

「訂正日露戦史」ですけれども、そういう表現は一切なくなっているんです。石光は第二軍の副官でしたから、第二軍の記録にそれを書かなかったはずはない。「訂正日露戦史」にはそれはいいです。簡単に取ったように書いてあります。訂正された戦史のほうはそういう調子の連続です。歴史家でしたらこれは真実であるとかいうのを証明しなければいけないと思いますが、私は文学の読者として、軍の公式記録はうそだと思います。石光のほうが真実

で正確だと思います。読者としての直感です。そういう意味で、私は石光の戦争の記録は正確であると申し上げたんです。

小松 面白い話題がたくさん詰まっているんですけども、最後まで上垣外さんの話がすっきりこなかったんですね。それはいろいろな社会的な背景とか時代的な背景とか、あるいは表現する人の社会的な地位とか、そういうものが詰まっているわけで、それを何か一つでくくれるというふうに思っているところがある、僕にはすっきりこなかったですね。

もう一つ、これは当たり前のことなんですけれども、文学というのは戦争を詳細に描くということじゃないと思うんですね。あるいは貧困を目の前にして貧困はこういうものだということを統計的にとか科学的に描くことじゃなくて、そのような状況とかできごとの中に、当たり前のことを言っているんですけども、人間はどんなふうにもその事件にかかわっているかを描く。つまり、人間を描くことなんですね。

戦争であろうと、貧しさであろうと、その中で人間が戦争でぼろもうけしようとか、あるいは悲惨になろうと、そこに人間を描くということが非常に大事なことだと思っただけです。

私は、たとえば今日紹介された石光真清が諜報機関のスパイとして報告書を書いた。書いたことは非常に正確に評価した結果を描いていて、文学として描いたわけじゃないと思うんですね。たとえばそれと対応するように、間宮林蔵が諜報的活動をして「東韓紀行」みたいなものを書いていきますね。それを比べたときに、どれだけ正確に人間が、その習俗が描かれているかということ、文学的に描かれているかということと違うんですね。同じ作品だったら、間宮林蔵とか吉村昭を読んだほうが人間が発見できる。人間を描くということと習俗を描くということと、戦争を描くこととは区別して考えないといけないんじゃないかというふうに、私はお話を聞きながら思いました。上垣外 それについてお答えします。

石光が文学として読めるというのは、一例だけあげますけれども、プラゴベヒチェンスクに彼がロシア語を勉強しに行っているときに、ロシア人によ

る中国人の大虐殺があるんですね。義和団事件というのがあって、ブラゴベヒチエンスクの中国人たちがそれに乗じて不穏な動きがあるんじゃないかというところで、コサックが出動して、そこにいた中国人、商人とかを一人残らず全部殺してアムール川に投げ込んでしまう。

石光はそこをどういうふうに書いているかというと、その一部始終を傍観していた一ロシア市民の語りとして書いてあるんですね。実に、私はみごとだと思いました。文学と言えるところは、ヘミングウェイの「誰がために鐘は鳴る」という小説がありますが、その中で人民戦線の側のピラールという女のゲリラがいるんですけども、彼女が、人民戦線の側が政府軍側を大虐殺する場面があります。それを語りで書くのと本当に近い。専門のプロの文学者が書くのと同じ手法だと思うんですね。そういうテクニクがある。

第二は戦争の詳細な記録ということで、日露戦争では「肉弾」という桜井忠恩の有名ながあります。私は子供のころ、いま言うところの恥ずかしいんだけど、小学校のとき愛読したんですね。一節一節覚えるぐらい読んでいました。それは本当に戦争の詳細な記録です。どういうふうな戦争が行われたか。石光の日露戦争の記述はずっと短いです。だけどいま小松さんのまさにおっしゃった、人間が描かれているかというところは、石光を読んだときに、まったく比較にならない。石光のほうがはるかにすばらしく書いているというふうに思ったんです。それは私が小学校のときに「肉弾」を読んでから十年ももった後のことなんですけれども、桜井忠恩とはまったく違うというふうに思いました。

鈴木 いままであまりにも、戦後の文学だけではなくて、戦時中に書かれた文学の掘り起こしが進んでいないために、ちよつときつい言葉になります。が、上垣外さんが言われたような傾向が日本の文学にあるかのようには思われているかもしれません。が、ルポルタージュや小説の中に上垣外さんのこの視点で読んでも感激するような作品は、戦時中でさえたくさん書かれています。

いままで見過ごされてきたものの掘り起こしの努力を重ねることが必要でしょう。メラノヴィッチさんの、日本の文学に関したいへん面白い提起が

あったと思うんですけども、そういうことにも答えなければいけないのではないかと。私たちは、そういうことも含めて研究していかなくてはいいかと思えます。

モートン 短いコメントですけども、石光真清の作品を私は読んだことないですから、コメントできないですけども、それは上垣外さんの面白い発見だと思えますが、明治大正文学などでは反戦文学というのがあります。山口先生がさっきおっしゃったんですけども、被害者の気持ちを書いてくれる作家が少ない。小熊秀雄という詩人がありますね。その詩人が朝鮮人の悩みをよくとらえておられますね。上垣外先生は詩の話をしたんですが、この考え方は特に有名な、失業者の詩とか、いろいろなそういう詩を書いたわけですけども、社会主義詩集、彼の詩集はもちろん戦後までは検閲で出版できなかったです。それから、小熊秀雄の詩も検閲のせいで戦後見られるようになったんですね。検閲があった時分は、小熊秀雄も一般の文学者でして、詩の優れた文学ですね。

思考の問題に変わりますけれども、詩の場合、有名な文学者の日記とか思いつくか、たとえば有島武郎の日記の文には日露戦争の激しい批判があつちこちに書いてあるわけですね。あれはもちろん戦後までは読めなかったんですけども、戦前に出た全集を見ると全部抜いているわけです。検閲ですからね。戦後になるとはつきりとわかるわけですね。彼はもちろん、一人ばかりではないですけども、社会主義派の作家、思想家、日露戦争を鋭く批判しましてね。キリスト教派の作家も批判しました。だから、いくつもあると思えますね。

石光真清の文章と比べることはできないと思いますが、さつき小松先生がおっしゃったように、文学とレポートあるいはルポルタージュも文学のジャンルなんですけれども、事実を見てそれを日記で書く、写すという目的というものがあつたら、それは文学じゃないかもしれない。文学になる可能性がありますけれども、定義するのは難しいですね。だけど、文学で書くつもりで文学を書いた人が結構いるわけで、その文学を見ると、反戦的例が

いつくもあると思います。

中西 石光真清のヒューマニズムをめぐりまして、大分そこに論点が集中しているんですけども、それと、たとえばリーマン先生の言われた「黒い雨」をもとにした、はたして文学は戦争に対して言葉があるのかという、たいへん厳しい戦争に対する告発だったと思いますけれども、そういうものの中で、やはり日清、日露戦争と後の第二次世界大戦との違いがさっきから話に出ていますので、そのことに關して、私のオリジナルな意見ではないのですけれども、戦争をめぐる国際法の違いによるのだろうという意見がありますね。テーマが「文学と社会」ですから、それも申し上げておいたほうがいいと思って発言をさせていただきました。

釈迦に説法のことを申せば、戦争というのは一体なんだというときに、戦争はどちらかに正義があつてどちらかが悪である。正義が悪を退治するため起こるのだという、これは現在多分にそう考える考え方が多いようですけれども、そんなことを言ってみたら両方とも正義があるんだから仕方がない。成り立たない。だったら戦争が起こってしまえば、お互いにきれいに、ルール違反をしないで戦争をしようじゃないか。これが国際法のはじまりだというふうな意見があるんですね。

そういうルールが守られたのが、日本で言うところの日清、日露までだ。それ以後というのは、絶対的にどっちかが勝つ。負けたほうに対して戦争裁判をする。そして負けたほうはけしからんのだというふうに考える。たとえば第二次世界大戦なんかそうだったと思いますけれども、そういうふうに変わってきた。そういう変わり方の中で、いまの石光真清のヒューマニズムというものも生き得るのだろうという気がするんですね。

つまり、そこにまだお互いのルールを守りながら戦争をしようという考え方が日露戦争の基本にはあるということを書きました。たとえば二百三高地を攻めるときも、一時的に休戦合図が鳴って、その間は両方から出かけていって両軍の死体の収容をする。そしてまたそこでしばらくブレンダーなどをお互い持ち寄って飲んで「おまえたちは勇敢に戦う」とか「少し強引すぎやし

ないか」という話をして、また分かれてドンパチやるというふうな戦争をしたのが日露戦争だということです。

日清戦争のときにしましても、清国の丁汝昌という提督、彼は負けて自殺をするわけですね。負けた將軍に高級なフランスのワインを贈って、国旗で包んで遺体を清国に返すというようなことを日本の提督はやったということ言いますと、やはり石光真清の周辺に、まだ個人の存在し得る余地、あるいはヒューマニズムの存在する余地というものがあつた。

ところがそれ以降の世界大戦になってくると、集団戦に変わっていった、完全に国家対国家の戦いであつて、そこは徹底的に殺戮を行い続ける。そしてヒューマニティの生きる余地を無くしてしまうということがあるので、たとえばリーマン先生のような発言にもなってくるんだらうと思うんです。

そういう二つのタイプを考えてみると、日本の戦争は、杉本先生がいまさかにおやりのたとえば平家物語などは、上垣外さんはさつき血が同じで仲間だという話もなさつたけれども、その上に含めて、これはやっぱり個人対個人の戦争で「ヤーヤー、我こそは」と言つて、そもそも祖先はナントカだと何代も前から名乗りあうわけですね。これは一種のお見合いをしているわけで、相手の武將が自分の格に合わなければ「やめようよ」と言つて戦争はやらない。ところが「うん、これはおれにふさわしい相手だ」と思えばそこで切り結ぶというふうな、戦争のお見合いをやっているわけで、そういう個人戦が、日本が伝統的にやってきた戦争だったと思うんですね。

ところがそれに対して変更を強いるものが、二、三回日本の歴史の中にあつて、一回目は白村江の戦いで負けて、百済式の集団戦が日本に入ってきたこと、二度目は元寇の役で集団戦が入ってきて、一騎打ちの武者たちが無残に敗れたということとか、そういうものがありながら、しかし基本的には日本の武器というのは、たとえば鉄砲ではなくて刀であり続けた、つまり個人戦であり続けたという歴史があるわけですね。そういう日本の戦争に対する一つの通念のようなもの、あくまでも個人が戦うのだという考え方、それが近代思想の中にさらされて集団戦の中で崩れていく、あるいは変更を余儀なく

されていく。そういう歴史あるいは社会的な仕組みがあつて、その中で我々の持っている文学がどういうあり方をするのかということになるんだと思うんですね。

もちろん文学が苛烈な戦争の中で言葉を持たないとか、あるいは文学はルポルタージュじゃなくて人間を書くんだという小松先生のお話には大賛成ですけれども、そういうものはあつたにしても、やはり基本的な戦争の構造の違いというものが、私は今日上垣外さんのお話を伺って一番関心を持ったところでした。そういう点で、今日のご発表も私にはたいへん有益だったし、このセッションも成功だったと思いますね。

杉本 次の小講演会がひかえておりますし、時間が迫ってまいりましたので、これで終わります。

どうもありがとうございました。